

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Last grains head for the barn

オランダ

2009年最後の収穫作業



「私が収穫した畑の中には収量1ha当たりの収量が8tから14tに増えたところもありました。このトウモロコシは豚の飼料に使われる予定です」(ヘーニ・ウォルタリング氏)

トミネータ98型で収穫作業を行なったヘーニ・ウォルタリング氏によると、最後に収穫した0.72haの畑の収量は約8tで、1ha当たりに換算すると11tの収量に相当する。



2009年末、オランダの作業請負業者レットインク社は、同国のウエステンドーフ村の圃場に作付けされたトウモロコシの最後の1列を収穫した。この年はクラス社製トミネータ98型コンバイン(写真参照)を使用し、300ha以上の食用トウモロコシを収穫する一方、クラス社製シヤガー型飼料収穫機を使って350haの飼料用トウモロコシの収穫も行なった。

Technology can increase corn profits

米国

先進技術でトウモロコシ増益



グレン・フランツルバー氏(右)は、彼が持っているデータの活用を顧客に勧めている。

彼の顧客の農業経営者は、1エーカー当たり3〜5ドルのコンサルタント料金を支払い、増収できない場合でも1エーカー当たり最低5ドルの利益を得ているという。

「このプログラムを採用すれば、1袋2000ドルの種子で1エーカー当たり約8〜5ドル節約可能で、収量は平均8〜10ブッシェル(200〜250kg)増加します」(グレン・フランツルバー氏)

セントラル・ヴァレイ農業社の精密農業経営部門でアドヴァンスト・クロッピング・システム(先進栽培方式)に携わるグレン・フランツルバー氏は、先進技術の導入により収入が増えることを示すデータを持っている。農地3万8000エーカー(約1万5000ha)の土壌サンプルと収量を地図上に記録した3年分のデータだ。



トウモロコシの播種率を変えただけで1エーカー(約0.4ha)当たり10ドルの収入増が見込めるとしたら、それを実現する技術の導入を農業経営者はどう考えるだろうか。

News from the north

フィンランド

北の国からのニュース



アグロニック社は、2車軸と3車軸のスラリー・タンカーの車体に別料金でクラブ・ステアリングを搭載することを推奨している。

「積載量11〜25mの2車軸か3車軸のアグロニック社製タンカーには、斜め方向に移動可能なクラブ・ステアリングが搭載可能で40cmのディスクが付いた8mのフームのオフションも用意されている。その他の農業関連情報」

なお、フィンランド国内には6万1000の農場があり、全耕作地220万haの50%が穀物生産地である。

2009年度にフィンランド国内で販売された50馬力以上のトラクタは約2850台、新型コンバインは約3300台となり、トラクタの販売台数については前年に比べて20%以上のマイナスとなった。今のところ2010年度に状況が好転するような兆しは見えていない。



氷の国フィンランドから2009年度の農業機械の販売状況とそれに関連するいくつかのニュースをお届けする。



Tractor bloke does it for the dogs
オーストラリア

盲導犬のために走るトラクタ野郎



フランク・シヴァートン氏は盲導犬のためにクイーンズランド州内1周5,900kmを走破した。

「1匹の盲導犬を訓練するのに3万ドルもかかる」と知った時は本当に驚いた」と旅の動機を語るシヴァートン氏は、この後援活動によって総額3万ドル（約220万円）以上の大金を調達した。

ある「トラクタ野郎」が、クイーンズランド州盲導犬協会のために後援活動を行なった。トラクタ野郎とは、フランク・シヴァートン氏のことだ。彼が行なったのは、信頼するチェンバレン社製の古いチャンピオン306型トラクタでのクイーンズランド州内1周5900kmの走破だ。

出発したのは7月15日の涼しい朝。移動中の生活を少しでも快適にするためにハウス・トレーラーを牽引しての走行だった。トラクタのオープン・キャビンでは、ひと昔前のような旅の風情を感じることもあったそうだが、スタート直後に砂嵐の洗礼も受けるなど、苦難に絶えながら彼が2〜3年かけて立てた計画通りに進む旅だったという。

シヴァートン氏は地図に大きな8の字を描くように各地を巡っていく計画を立てていた。ニュー・サウス・ウェールズ州に回り込む前に北上してイサ山に向かい、そこに集まっている群衆に会うためだ。

「イサ山で開催されているロデオ大会や牧畜業者らが集まるカムウィル市のドローバー・リユニオン祭り、パースヴァレイの競馬大会にぜひ参加したかった」（フランク・シヴァートン氏）

さらにウィンントン市の内陸祭りとドールビー市のビーフ祭りにも行きたかったと語る彼が走行した距離は、1日200km、時には350kmにも達した。

オーストラリア農業大学ドールビー校では、農業者や大学の教員たちがシヴァートン氏の到着を1週間以上も待ちわびていた。同校にシヴァートン氏がたどり着き対話集会を開いた時には、トラクタの前輪は230万回という途方もない回転数になっていたそうだ。

Made to measure in three weeks
南アフリカ

3週間で完成した新型トラクタ



無事に完成したトラクタはYTO社の75馬力モデルに多少手を加えたもののように見えるが、シンクロ・トランスミッションとデファレンシャル・トランスミッションも搭載されており、80馬力のエンジンには最新式の果樹園用噴霧器に適合するようにくつとコンパクトになっている。新型の前輪車軸と幅の狭い3点リネージュも装備されている。出力は540rpm、動力取出装置の速度は540opto。この製品の設計に関するパテントは世界中で登録されることになる。

「コビア・ヴァン・ブレード氏はYTO社製の新型果樹園用トラクタに誇りを持っているが、それには相当の理由がある。

このトラクタが開発される前、ヴァン・ブレード氏と彼が経営するVB農業社のスタッフは中国最大の事業規模を持つと思われるYTO社のスタッフと出会う機会があったが、当時、VB社はまだ果樹園用トラクタを生産していなかった。だが、この出会いをきっかけにヴァン・ブレード氏と2人の技術スタッフは中国に滞在することにし、YTO社が求めるトラクタの設計について同社の調査部と開発部のスタッフと話し合うようになる。そこでYTO社が製造予定の製品の完成までに2〜3年かかると聞いたヴァン・ブレード氏は、設計をVB社が担当することを提案した上、「このプロジェクトに要する時間は？」と訪ねる中国側に対して「我が社なら3週間以内でできる」と無謀とも思える回答をしたのだ。